



CIVIC FORCE

NEWS LETTER Vol.7

ニュースレター (May, 2016)

熊本地震
特別臨時増刊号



熊本地震で特に大きな被害を受けた益城町内2カ所でエマージェンシーテントを設置し、2016年5月現在200人以上の方の避難場所として活用されています。熱中症などを懸念する町の指示で、テント村は5月末で閉鎖を予定しているため、緊急支援チームは今、代替場所の選定に奔走しています

©CF / A-PAD Japan / PWJ

余震続く熊本地震と緊急支援活動

震度7を観測する地震が4月14日に発生し、以降、度重なる余震が続いている熊本県では、これまでに49人が亡くなり、今も行方が分からない方がいます。長引く避難生活の影響で体への負担や持病の悪化などで命を落とした方もいます。

今回の熊本地震は住宅の被害が甚大で、5月18日までに確認された数字は、全壊4569棟、半壊1万1629棟、一部破損5万4491棟。調査途中のため数字はさらに増える見通しです。大分県でも1000棟以上の住宅被害が報告されています。

また、災害対策本部によれば、発災から1カ月以上が経過した5月18日時点で、県内226カ所の避難所に9900人以上が避難しているとされています。このうち特に避難者が多い益城町では3200人以上が未だ避難生活を送っており、これ以外にも車中泊を続ける方の姿があります。

3カ月に一度、皆様にお届けしている「Civic Force ニュースレター」では今回、特別臨時増刊号として熊本地震に対する支援活動についてご報告します。

Contents

P2 被災地を支援する

- ・レスキュー犬とともに行方不明者を捜索
- ・Pick Up! 3団体の強みを生かしより効果的な被災地支援を
- ・小規模避難所に物資を配布
- ・「5日ぶりの着替え」涙ぐむ避難者も
- ・ストレスを抱える子どもたちのために
- ・車中泊の避難者らにテントを提供
- ・61世帯212人が暮らすテント村を運営
- ・被災地の支援活動を支える社会人ボランティア

発行日：2016年5月
 発行：公益社団法人 Civic Force
 〒151-0063 東京都渋谷区富ヶ谷 2-41-12
 富ヶ谷小川ビル2階
 TEL：03-5790-9366
 e-mail：info@civic-force.org
 URL：http://www.civic-force.org



©CF / A-PAD Japan / PWJ

被災地 を 支援する

東日本大震災の支援活動をはじめ、日本各地で発生する災害時の緊急支援活動についてお知らせします。今回は、熊本県での緊急支援活動についてご報告します。

熊本 地震

レスキュー犬とともに 行方不明者を捜索

4月14日21時26分、熊本県で震度7の地震が発生しました。Civic Forceは発災直後に情報収集を開始し、同日23時頃、パートナー団体のアジアパシフィックアライアンス・ジャパン(A-PAD ジャパン)とピースウィンズ・ジャパン(PWJ)とともに緊急支援チームを結成。チームの拠点である広島から陸路で、特に被害の大きかった熊本県中部・益城町の惣領地区と安永地区に入り、被害状況の確認とレスキュー犬による被害者の捜索活動を実施しました。

また、4月16日午前1時25分頃に新たに発生した震度6強の地震を受け、再び被災地に向けて出発した緊急支援チームは、翌朝10時に南阿蘇村に到着し、被害状況や行方不明者に関する情報収集を開始。午前11時半頃には、救助犬とともにヘリコプターで駆けつけた第2陣が合流し、警察や消防、自衛隊などと協力して、壊れた家屋の下敷きになった行方不明者の捜索活動を実施しました。

(右) 南阿蘇村での捜索活動の様子。壊れた家屋の下敷きになった人を探すレスキュー犬「ハルク」

(下) 地震によって崩れた道路を抜けて阿蘇村の住宅地に向かう緊急支援チーム



Pick Up !

3団体の強みを生かし より効果的な被災地支援を

Civic Force と A-PAD ジャパン、PWJ の3団体で構成される緊急支援合同チームは、2011年3月の東日本大震災の支援経験をもとに結成されました。海外での支援経験や企業とのネットワークなどそれぞれの強みを生かして迅速に対応できるよう、月に数回、広島県でレスキュー訓練を実施しています。

2015年4月のネパール地震や同年9月の台湾台風で行方不明者の捜索活動にあたったほか、同年9月に発生した関東・東北の大雨災害では、茨城県常総市において孤立した避難者を支援。緊急支援チームには、殺処分寸前にPWJに引き取られた災害救助犬「夢之丞(ゆめのすけ)」も含まれ、災害救助犬「ハルク」とともに被災地の最前線で活躍しています。



ヘリで熊本の被災地へ向かう緊急支援チーム

熊本地震

小規模避難所に物資を配布

「被災地に物資は足りている」――発生から約1週間が経った頃、メディアや SNS などでのこのような情報が流れる一方、認可外の小さな避難所では、まだ十分に物資が届いていない場所がありました。

それまで益城町の総合体育館を拠点に物資の調達と配布を続けてきたチームは、埋もれたニーズを把握し、少しでも多くの人に必要な物資を届けるため、4月21日から小規模な避難所を対象に物資の配布を開始しました。

地元企業、三共リース（株）の協力で同社の倉庫を無償で借り、全国の企業や個人の皆さまから届けられた物資を一時保管。配布にあたっては、21日に現地入りしたヤフー（株）のスタッフとともに、公民館や保育園、幼稚園、老人介護施設などをリスト化し、各施設に電話で問い合わせして避難者の有無や人数、ニーズを聞き取りました。そして、結果を施設マップの情報に落とし込み、効率良くまわられる配送ルートを決めた上で、2トントラック数台で物資を配りました。配った物資は、下着や靴下などの衣類のほか、食事の偏りやビタミン不足を解消するための甘夏やサプリメント、食糧や水など。要望のあった歯ブラシや紙食器などの日用品も取り寄せて配りました。

「5日ぶりの着替え」 涙ぐむ避難者も

物資を受け取った避難者の方の中には「発災から着の身着のまま避難して以来、5日以上一度も着替えることができなかった。洗濯をする水もなく本当に困っていた。やっと新しい下着に替えられる」と涙を流して喜んでいる方もいました。

また、地域の避難者を受け入れている益城幼稚園の園長は、「家が全壊し、服などを取り出せない人が多いなか、服が届くと伝えたらみんな喜んで到着を待っていた」と話しています。



被災地に届けた物資は、東日本大震災支援をきっかけにつながりのあった企業などからも提供されています

熊本地震

ストレスを抱える子どもたちの 笑顔を取り戻すために

「子どもの日」の5月5日、避難所の一つとなっていた熊本市立春竹小学校で、震災後初めて、子ども向けのイベントが開催され、地域の子どもたち約80人が集まりました。

イベントを企画したのはPTA会長の中里成寿さんら地域の皆さん。「余震が続き、建物の倒壊など安全確保が心配で子どもたちを外で遊ばせることができなかったから」と開催の動機を語ってくれました。

地震の影響で、熊本県内では5月10日頃まで熊本市や益城町、南阿蘇村などの小中学校155校が休校し、子どもたちは避難所や自宅、親戚の家などで引きこもるように生活してきたといいます。

そこで「思いっきり外で遊ばせたい」と、小学校の校庭を会場に、ゲームや紙芝居

の読み聞かせなどを行いました。また、子どもたちは学校までの道のりでゴミ拾いをしたそうです。「こんなにたくさん遊べるのは地震以来初めて。友だちと会えて嬉しい」と笑顔を見せてくれる小学生もいました。



Civic Force はこの日、子どもたちの遊びの間に、甘夏やかきんとう、チョコレートなどのお菓子を配りました

熊本地震

車中泊の避難者らに テントを提供

熊本県では4月17日時点で18万人以上、大分でも1万2500人近くの方が避難していました。大きな被害を受けた益城町の総合体育館でも400人以上の方が建物の内外に溢れていました。

そこでチームは17日から大型の緊急避難用テント「バルーンシェルター」を設置。20日からはエマーゼンシーテントを提供し、車中泊を続けてきた方やペット連れの家族などに利用されています。

エマーゼンシーテントとは、災害発生時に被災地での寝泊りや雨風をしのぐために多目的に使用できるテントです。床面積3m×5.5m(たたみ約10畳分)、高さ2.1m、6人程度の収容が可能で、国連機関が採用している仕様と同じスペックです。折り畳み式で、短時間で設置が可能です。

Civic Force ではこれらのテントを備蓄しており、発災直後、災害時支援協定を結んでいる静岡県袋井市に協力を依頼し、同市の防災倉庫から160基を熊本へ搬送しました。



車中泊を続けてきた方は「やっと手足を伸ばして横になれる」と安堵の表情を見せていました

61世帯212人が暮らす テント村を運営

2016年5月19日現在、益城町・総合体育館横の芝生広場(39世帯・149人・59匹)と、(株)再春館製菓所敷地内にある再春館ヒルトップ(21世帯・63人・31匹)の2カ所で、エマーゼンシーテントの避難所を設置・運営しています。

芝生広場のテント村では、毎日朝9時から17時までカフェを併設し、支援物資やコーヒーなどを提供しながら、避難者の方々の声を聞き、避難者同士の交流スペースとして定着しつつあります。また、テント生活が少しでも快適になるよう、再春館ヒルトップのテント村では、シャワー室やトイレ、洗濯機、遮熱シート、地デジアンテナなどを設置。ペットの預かりやドッグランの開設も始めています。



(上・右中央)「みんなの笑顔につながれば」とテント村併設のカフェにお花やノートを届けてくれる避難者の方も。(右下)熱中症対策が求められる中、地元農家の皆さんが遮光ネットを集めて設置してくれました

被災地の支援活動を支える社会人ボランティア

天候や状況に応じて変わる様々なニーズに対応しながら続けるテント村の運営は、一筋縄ではいかないこともあります。こうした活動を支えているのが、全国から駆けつけてくれた社会人ボランティアの皆さんの存在です。

公益財団法人佐賀未来創造基金を通じて、4月後半から約10日間にわたってテントの設置やカフェの運営に携わった永田千代美さんは、避難者の方やペット連れの家族などに声をかけながら、スタッフの一員として積極的かつ柔軟にボランティア活動を続けてくれました。

また、「ゴールデンウィークは熊本へ行くために長期で休みをとった」という会社員

の濱田友明さんは、テントの設置・運営や車中泊を続ける人への聞き取り調査などを実施。東京の会社で担当している経理の実務経験を生かして日々変わる入居者情報の管理などを担ってくれました。

